

Mario G.

Rossi フィレンツェ大学教授(イタリア)の短期招請について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学国際交流センター 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 桐生, 尚武 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/8043">http://hdl.handle.net/10291/8043</a>

### Ⅲ Mario G. Rossi フィレンツェ大学教授 (イタリア) の 短期招請について

政治経済学部教授 桐 生 尚 武

カトリックの国で、かつ左翼勢力の強いイタリアでは、政治的立場の違いだけでなく、資料利用の便の問題などから、カトリック系の歴史家はカトリック運動、カトリック政党の研究、左翼系の歴史家は労働、社会主義運動の研究と色分けされている。そんな中でマリオ・G・ロッジ先生は、非カトリックの視点から、つまり批判的な目でカトリックの政治、社会運動を研究されて来た。先生自身の話しではそのような視点からのカトリック運動の研究者としてはイタリアでも3人目とのことである。駿河台研究棟会議室での研究者、教職員対象の二回の講義、(1)転換期イタリアの政治勢力と制度改革、(2)イタリア現代史におけるカトリック政党は、そのような非カトリックの視点から、キリスト教民主党が与党第一党の地位を占める現代のイタリアの政治状況と問題点について述べられたもので、現在の日本の政治状況を考えるうえでも興味深いものであった。そもそも現在のイタリアと日本の政治状況にはかなりの類似性がある。カトリック政党と保守党という違いがあるとはいえ、一つの党が戦後一貫して政権の座にあり続けているというのは、先進国の中でもイタリアと日本だけである。その結果イタリアでもそれに伴う政治の構造的腐敗が重大化しており、暴力化さえしている。ロッジ先生が講義の中で明らかにされたところでは、南部のカラブリア州では地方選挙から今年前半だけでマフィア的組織の手になる政治的殺人事件は300件に上るとのことである。また現行の政治システムも社会の現実に対応しえなくなり、比例代表制の選挙制度のもとで少数分裂が恒常化し、安定した政府を樹立することが困難な状況にあり、選挙法改革を含めた政治制度改革が焦眉の問題となっている。その点も日本と同じである。ロッジ先生によれば、フ

ランス型大統領制による執行権力の強化、足切り条項の導入による小党の排除、上院に小選挙区制、下院に比例代表制の導入、優先投票（候補者個人への投票）の制限、各党の比例代表名簿作製過程への有権者の介入の権利など、日本と異なり様々な提案がなされているが、いずれも各党の党派的利害、議員の私的利害が競合、対立し、イタリアにおいても政治改革は容易ではないとのことである。さらには与党キリスト教民主党のクライアントリズム（政治家と選挙民の庇護と恩恵の関係）の実体、たとえばイタリア南部では労災保険の受給者が実際の労働者数を上まわる。あるいはマフィアなどの犯罪組織と野合しての地方での権力の維持などのキリスト教民主党の政治の実体などの興味深いエピソードを語られた。

和泉での講義（社会改革の失敗とファシズムの起源）は、イタリア・ファシズムについて講義している私の人文特講の授業時間に行なって頂いたが、すでに前期において該当する時期についてはひと通り授業で触れておいたので、学生のファシズム理解も進んだものと期待している。

先生は英語、仏語もお出来になるが、3回の講義はいずれもイタリア語でお願いした。というのも英語で講義したとしても出席者がそれほど増えるとは思えなかったこと、生のイタリア語を聞く機会の乏しい日本では、イタリア語による生の講義は貴重であり、そのことのために出席される人もいるかと考えたからであり、事実予想に違わず数人の学生がそのような目的で出席された。そのため、日本語の通訳をつけただけでなく、前もって講義のテキストを送って頂き、講義の際にテキストの原文と共にその日本語訳を配布し、イタリア語を知らない者にも出来るだけ内容が理解できるように努力したのである。その結果、駿河台の2回の講義では積極的に質問があい継ぎ、時間が足りなかった。日本では現在イタリアがブームの観を呈しているが、それもファッションとか料理に片よっており、イタリアの実情を広く、もっと良く知るためにも、今回のロッソ先生の明治大学での講義は有益だったと思われる。

ひとつ残念であったのは、イタリアの学校教育における歴史、特に現代史教育についての講義をしてもらえなかったことである。ロッシ先生は教育学部所属であるだけでなく、第二次大戦中のレジスタンスを戦った諸党（キリスト教民主党から共産党まで）が、レジスタンスに限らず広くイタリア現代史を研究し、市民を啓蒙する目的で組織したイタリア解放運動史研究所の副所長、また、フィレンツェにあるそのトスカーナ州の支部、トスカーナ・レジスタンス史研究所の運営委員でもあるからである。これは全く私の手落ちであった。

先生は来日前にかなり日本について勉強されて来た様子でみんなを驚かせた。京都、広島への旅行も先生が希望されたものであった。広島原爆資料館では、先年来日されたイタリアのサンドロ・ベルティーニ大統領のメッセージを見つけたと喜んでおられたが、やはり被爆の惨状には声が無かったようである。奥さんは京都を気に入られたが、先生はむしろ銀座、新宿など生きている現代都市、東京の方にひかれておられた。世界的な観光都市フィレンツェに住んでおられること、また現代史研究者ということからも、なるほどと思われた。先生は、一週間遅れて来日された奥さんと無事、10月21日、イタリアに戻られた。最後にお世話になった国際交流センターの職員のみなさんにお礼を申し上げます。